# 文芸評論

下巻

小林秀雄

筑摩叢書 210

筑摩叢書　210

# 文芸評論

下　巻

小林秀雄

筑摩書房

小林秀雄（こばやし　ひでお）
1902年　東京に生まれる
1928年　東京大学仏文科卒業
著　書　「小林秀雄全集」（全12巻）
「本居宣長」（「新潮」連載中）

文芸評論　下巻　　筑摩叢書 210

1974年9月5日　初版第一刷発行

著　者　小林秀雄
発行者　井上達三
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京（291）7651番（代表）
振替 東京4123番
郵便番号 101－91

© 1974 Printed in Japan.

（分類）1095（製品）01210（出版社）4604　三松堂印刷・永興舎製本

# 目次


昭和十一年

作家の顔　三
岸田国士の「風俗時評」其他　七
思想と実生活　一一
中野重治君へ　一七
文学者の思想と実生活　二〇
現代小説の諸問題　二〇
「夜明け前」について　二六
トルストイの「芸術とは何か」　二九
現代詩について　四四
言語の問題　五一
演劇について　五四
「罪と罰」を見る　五九
文学の伝統性と近代性　六四

昭和十二年

戸坂潤氏へ　七一
菊池寛論　七五
「日本的なもの」の問題　八八
文科の学生諸君へ　九三
文化と文体　九七
窪川鶴次郎氏へ　一〇二
現代作家と文体　一〇三

文芸批評の行方　一〇七
酒井逸雄君へ　一一九
戦争について　一三三
宣伝について　一三九
昭和十三年
女流作家　一三四
日本語の不自由さ　一三九
志賀直哉論　一四三
野上豊一郎の「飜訳論」　一五六
山本有三の「真実一路」を廻って　一六〇
現代日本の表現力　一七三
昭和十四年
「仮装人物」について　一七八
映画批評について　一八一
疑惑　I　一八六
疑惑　II　一九五
事変と文学　二〇一
鏡花の死其他　二〇六
神風といふ言葉について　二一三
学者と官僚　二一七
歴史の活眼　二二四
イデオロギイの問題　二二六
昭和十五年
アラン「大戦の思ひ出」　二三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モオロアの「英国史」について　二四三
処世家の理論　二四八
環境　二五〇
事変の新しさ　二五八
マキアヴェリについて　二六七
昭和十六年
感想　二七三
モオロワ「フランス敗れたり」　二七八
島木健作　二八一
林房雄　二八五
川端康成　二九一
林房雄の「西郷隆盛」其他　二九六
伝統　三〇〇
昭和十七年
戦争と平和　三〇九
「ガリア戦記」　三一一
昭和十八年
ゼークトの「一軍人の思想」について　三一四
文学者の提携について　三一九
昭和二十三年
現代文学の診断　三二三
解説　中村光夫　三三五
関係年表
人名書名索引　郡司勝義

上巻　目次

昭和四―六年　様々なる意匠　志賀直哉
アシルと龜の子　Ⅰ
アシルと龜の子　Ⅱ
アシルと龜の子　Ⅲ
アシルと龜の子　Ⅳ
アシルと龜の子　Ⅴ
文学は絵空ごとか　横光利一
物質への情熱
マルクスの悟達
文芸時評
心理小説
昭和五年　ナンセンス文学
新しい文学と新しい文壇
批評家失格　Ⅰ
我まゝな感想
感想
昭和六年　井伏鱒二の作品について
批評家失格　Ⅱ
昭和七年　文芸批評の科学性に関する論争　室生犀星　谷崎潤一郎
再び心理小説について
「安城家の兄弟」
もぎとられたあだ花
フランス文学とわが国の新文学
弁明―正宗白鳥氏へ
純粋小説といふものについて
正宗白鳥
梶井基次郎と嘉村礒多
批評について
現代文学の不安
小説の問題　Ⅰ
小説の問題　Ⅱ
逆読といふものについて
同人雑誌小感
手帖　Ⅰ
年末感想
作家志願者への助言
昭和八年　手帖　Ⅱ
文学批評に就いて
手帖　Ⅲ
故郷を失つた文学
批評について
文芸時評
私小説について
手帖　Ⅳ
嘉村君のこと
文学界の混乱
レオ・シェストフの「悲劇の哲学」
僕の手帖から
林房雄の「青年」
佐藤春夫論
「紋章」と「風雨強かるべし」とを読む
文芸時評に就いて
再び文芸時評に就いて
私小説論
新人Xへ
「ルナアルの日記」
昭和九年
昭和十年

# 文芸評論

下巻

## 昭和十一年

# 作家の顔

「文学界」（昭和十一年二月号）に、一つ異様な小説が載つてゐる。北条民雄氏の「いのちの初夜」だ。作者は癩病院で生活してゐる癩患者である。この雑誌に以前同じ作家の作品「間木老人」が発表された時、その号の編輯後記に、作者は癩病患者であるといふ文句があるのを見咎めて、ある人が、実に失敬だと憤慨してゐたが、さういふ人も、この第二作を読めば、僕等は、お互に、実に失敬だなぞと憤慨する結構な社会に生きてゐる事を納得するだらう。

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。……あの人達の『人間』はもう死んで亡びて了つたんです。たゞ、生命だけが、ぴくぴくと生きてゐるのです。なんといふ根強さでせう。誰でも癩になつた刹那に、その人の人間は亡びるのです。死ぬのです。社会的人間として亡びるだけではありません。そんな浅はかな亡び方では決してないのです。癈兵ではなく、癈人なんです」

作者は入院当時の自殺未遂や悪夢や驚愕や絶望を叙し、悪臭を発して腐敗してゐる幾多の肉塊に、いのちそのものの形を感得するといふ、異様に単純な物語を語つてゐる。かういふ単純さを前にして、僕は言ふところを知らない。

読者さへ増えれば、創作のモチフなどは、どうであらうが構はない文士から、「小説の書けない小説家」といふ小説を書かざるを得ない文士に至るまで、何も彼もひつくるめて押流す濁流の様な文壇から、かういふ肉体の一動作の様な、張りのある肉声の様な単純さを持つた作品を、すくひ上げて眺めると、何かしら童話染みた感じがする。癩病院の風景が、恐らくは如実に描き出されてゐながら、そんなものを知らない僕には何か幻想的な感じを与へるのと一般であらう。自意識上の複雑な苦痛の表現も、この作者から見れば、何んの事はないいのちを弄ぶ才能と映ずるかも知れない。

いづれにせよ稀有な作品だ。作品といふより寧ろ文学そのものの姿を見た。或る人曰く、俺に癩病になれとでも言ふのかい。

フロオベルの「ジョルジュ・サンドへの書簡」（中村光夫訳）を読む。彼の書簡中で、恐らく一番興味ある部分ではないかと思はれる。

「現在の私は、既に消え去つた、これはさまざまな私の個性の結果です。私はナイル河の船夫だつた。カルタゴ戦役の頃のロオマでは女衒、シュブルではギリシャの遊説家でした。そこで私は南京虫に食はれました。私は十字軍の遠征でシリアの海岸であまり葡萄を食ひすぎたために死んだのです。私は海賊であり、僧侶であり、香具師、馭者もやりました。多分東洋の皇帝にもなつたことがありませう？」

「芸術家はその作品の中で、神が自然に於ける以上に現はれてはならぬと思つて居ます。人間とは何物でもない、作品が総べてなのです。この訓練は、殊によると間違つた見地から出発してゐるのかも知れませんが、それを守るのは容易ではないのです。しかし少くとも私にとつて、これは自ら好んでなした絶間のない犠牲でした。私だつて自分の想つた事を云ひ、文章によつてギュスタフ・フロオベル氏を救つたら随分いゝ気持でせう。だがこの先生に一体何の価値があるでせう」

「極度に集約された思想は詩に変ずる」と彼は言つてゐるが、この引用句などは、たしかに詩に変じてゐる。構造は明らかではないが、人の胸に飛び込んで来る。僕は原文を探して大きな声で読んでみる。幾度くり返しても飽きないのである。

人間とは何物でもない、作品がすべてだ。そして書簡を書けば、書簡がすべてだ。僕等は書簡中を探して、どこにも実在のフロオベル氏の姿に出会ふ事が出来ない。クロワッセの書斎から、ジョルジュ・サンドに手紙を書いたといふ事実がわかるだけである。渦巻いてゐるものは、文学の夢だけだ。もはや、人間の手で書かれた書簡とは言ひ難い。何んといふ強靱な作家の顔か。而も訓練によつて仮構されたこの第二の自我が、鮮血淋漓たるは何故だらう。

ロオレンスの手紙の一節。

「僕には自信がないし、たゞたゞ筆を取るのが僕は嫌なんだ。原稿を見てゐるだけでも僕がどれ程嫌なのか、君には解らない。心そこから、運命が僕を『作家』ときめちまはなかつたらと、思ふね。作家とは人心を虫ばむ仕事だ。……君、僕が自分の宿命を、嘆いてゐるんでないことは確だ。たゞ文筆の世界とは、特にいとはしい、しかも強力な世界であると思ふ——と、言つてゐるだけなのだ。美しい国土



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の下にふさはしからぬ地下層があるやうに、文学的素質といふものには、生命のありとあらゆる下層に浸潤して、成長の根原に密着するものなのだ。あゝ、そこがたまらないんだ！　あゝ、この宿命から、解放されたら……」

この様な嫌悪の情は、人間の叡智に密着してゐる。今日の多くの作家達が、かういふ形而上学的苦痛からは解放されてゐる様な顔をしてゐるが、誰がそんな顔を信ずるものか。たゞそんな気がしてゐるだけなのである。言葉を代へて言へば、作家各自のうちに、拡大する世間智が、かういふ苦痛に眼かくしをしてゐるだけの話なのである。

癈人の頭に「不死鳥」がとまる。恐らくロオレンスは、かういふ思想を抱いて生きたのではなかつた。併し、在りやうはさういふものであつた。いとはしい而も強力な作家といふ宿命から、遂に彼が解放されなかつたのだとすれば。僕を悩ますものは果して過ぎ去つた大作家の亡霊に過ぎないであらうか。

正宗白鳥氏が、トルストイに就いて書いてゐた。

「廿五年前、トルストイが家出して、田舎の停車場で病死した報道が日本に伝つた時、人生に対する抽象的煩悶に堪へず、救済を求めるための旅に上つたといふ表面的事実を、日本の文壇人はそのまゝに信じて、甘つたれた感動を起したりしたのだが、実際は妻君を怖がつて逃げたのであつた。人生救済の本家のやうに世界の識者に信頼されてゐたトルストイが、山の神を怖れ、世を怖れ、おどおどと家を抜け出て、孤往独邁の旅に出て、つひに野垂れ死した径路を日記で熟読すると、悲壮でもあり滑稽でもあり、人生の真相を鏡に掛けて見る如くである。ああ、我が敬愛するトルストイ翁！」

あゝ、我が敬愛するトルストイ翁！　貴方は果して山の神なんかを怖れたか。僕は信じない。彼は確かに怖れた、日記を読んでみよ。そんな言葉を僕は信じないのである。彼の心が、「人生に対する抽象的煩悶」で燃えてゐなかつたならば、恐らく彼は山の神を怖れる要もなかつたであらう。正宗白鳥氏なら、見事に山の神の横面をはり倒したかも知れないのだ。ドストエフスキイ、貴様が癲癇で泡を噴いてゐるざまはなんだ。あゝ、実に人生の真相、鏡に掛けて見るが如くであるか。

あらゆる思想は実生活から生れる。併し生れて育つた思想が遂に実生活に訣別する時が来なかつたならば、凡そ思想といふものに何んの力があるか。大作家が現実の私生活に於いて死に、仮構された作家の顔に於いて更生するのは

その時だ。或る作家の夢みた作家の顔が、どれほど熱烈なものであらうとも、彼が実生活で器用に振舞ふ保証とはならない。まして山の神のヒステリイを逃れる保証とは。かへつて世間智を抜いた熱烈な思想といふものは、屢々実生活の瑣事につまづくものである。

「今日、社会問題が、私の思想を占めてゐるのは、創造の魔神が退いたからである。これらの問題は、想像の魔神が既に敗退したのでないなら、席を占めることは出来なかつたのである。どうして自己の価値を誇称する必要があらう。嘗てトルストイに現れたもの、即ち否定し難い減退を自分の裡に認めることを何故拒否する要があらう」（「ジイドの日記」、一九三二年）

トルストイもジイドも、彼等の過去の創造の魔神を信用出来なくなつた時、新しい第二の魔神を得た筈だ。その背後を探して細君だとか家出だとかいふものを見附け出したところで何になる。何故例へば狂水病で狂ひ死にしたカントでも想像して、人生の実相がそこにあると言はないか。蛋白質合成の遊戯に耽る科学者の方が、よほど男らしい。偉人英雄に、われら月並みなる人間の顔を見附けて喜ぶ趣味が僕にはわからない。リアリズムの仮面を被つた感傷癖に過ぎないのである。

僕は、今日までやつて来た実生活を省み、これを再現しようといふ欲望を感じない。さういふ仕事が詰らぬと思つてゐるからではない、不可能だと思ふからだ。泥の中を歩いて来た自分の足跡を、どうして今眺められようか。今時私小説の書ける人はきつと砂地を歩いて来たのだらう。僕は自ら省みて、人間とは何物でもないと信じてゐる。たゞこゝに再建すべき第二の魔神について恥しい想ひをしてゐるだけである。

（「読売新聞」昭和十一年一月）

# 岸田国士の「風俗時評」其他

岸田国士氏の「風俗時評」（「中央公論」）は面白い。現代社会の様々な部署で様々な生業を立てゝゐる人々が、めいめい勝手に、てんでんばらばらな気焔をあげてゐる。尤もらしい意見が口から出かゝる途端に、人間の眼に見えない悪魔みたいなものがゐて、いやといふほど身体のどこかを抓られる。医者に相談に行くと医者が抓られる。

抓つてゐるのは、確かに作者の手には違ひないが、その手がどんな恰好をしてゐるか詮索しようとなるとなかなか容易ではない。作中、親父と息子の対話で、現在日本のあらゆる風潮、運動、流行、みなその本質に於いて、知識人の与し得ない空虚さと厚顔しさを持つてゐる。理論や旗印しはなんとでもなるが一度その動機や真の目的を突き止めたら、卑しさでなければ単純さが幅を利かしてゐる事がわかる、云々の意見を述べて、中庸主義は当代の革命思想かも知れんといふ結論に達する。この息子だけは、悪魔に抓られず姉さんに抓られてゐるところをみると、作者の同情を得てゐるのかも知れない。尤も警察の署長さんだけは、抓られても一向平気で、決して悪性の痛みではない、痛がる奴に同情は無用だ、大いにやれやれ。選挙演説会の弁士なぞみんなくたばつちまへ。作者がけしかけてゐるのでもあるまいが、作者は痛がる奴に同情を寄せてゐない事は確からしい。などと詮索をしてゐると、批評家がほつぺたを抓られる様な具合に仕組んであるので始末が悪い。まあそのへんが味噌なんだらう。言つてみれば、見るもの聞くもの癪の種と言つたところか。

流石にひねりの利いた皮肉も各処にあるが諷刺的効果は全体として散漫で、溜飲を下げるとまではいかなかつたが、この消極的な諷刺の底にあるものは、決してディレッタンティスムではない。作者の率直な冷い眼がチラチラしてゐる。

「風俗時評」といふ言葉は恐らく岸田氏の造語であらうが、僕は度々氏の口からこの言葉を聞いた。文芸時評はつまらぬし、社会時評といふ様な大げさなものは出来ないし、やるなら風俗時評といふものをやりたいといふ話を聞き乍ら、成るほど現在の批評界に最も欠けてゐるものは、風俗時評とでも称すべきものだと考へてゐた。一般世人もこの批評界の欠陥に気がついてゐると僕は思つてゐる。例へば、本

紙（読売新聞）の「一日一題」といふ様な欄、あれは誰でも読む重要な欄だが、あの欄なんかでは大いに風俗時評的眼光が入用だと思はれるが、魅力ある文章を書いてゐる人はわづかに長谷川如是閑氏ぐらゐのものだ。あの欄の性質上思想を誇示する事も出来ない、独白に終らせる事も出来ない、而も現下の問題を巧みに短文中に捕へねばならぬ。さういふ場合普通にいふジャアナリスチックな才能ばかりがものを言はないといふ事もよく解るし、又筆者の社会的感覚とか文化的感性とかいふべきものの訓練の度合が実に鮮明に現れる。三木清氏などもあの欄を書いてゐて、その着眼には感心する事もあるが概念上の訓練に比べて感性上の訓練の貧しさが目立つのである。

中野重治君の「ある日の感想」（「文学評論」）を読み、やや不快を覚えたから、その事を書く。

「文学界」（二月号）の座談会で、談偶々文芸懇話会の事に及び、僕が、「この会が齎した純文学の大衆化といふ実際上の利益と作家等の思想の方向を歪めたといふ不利益と天秤にかけてみたら、さあどつちが下るかなあ」と言つた言葉を捕へ、俗論家中の俗論家、官僚の代弁者と罵つてゐる。そんなに僕の言葉が、君の癇に触つたかね、意外である。

僕は俗論と言へども口から出まかせを喋つたのではない。自らの俗論にひそかに信ずるところがなくては、「文学界」の編輯なぞ出来ないのである。先づそれを信じて呉れ給へ。「文学界」の同人改組の際、何故中野重治を同人としなかつたかといふ手紙を方々の読者から僕は貰つた。なかには奇怪な臆説を述べた詰問状もあつた。無論僕は放つて置いた、同人にも語らなかつた。序でだからこゝに明瞭にして置く。

あの際、僕は中野君の同人加入を極力説いた。呉越同舟のそしりなぞ聞き流して置け、アッソシアシオン・エゴティストで沢山だ、僕らが実際に今苦しんでゐるジャアナリズムの無統制を何んとかする為に、と僕は自分の俗論を吐露して君の助力を求めたのだ。君は僕の趣旨に反対すべきものを認めぬと明言した。だが自分の感じとして同人加入は好まぬと君は言つた。感じとは何かと僕があまり追求するので君は泣いて了つた。今にして思へば、あの時の君の胸中には「小説の書けぬ小説家」の苦痛が往来してゐたのであらう。君の涙の複雑さも今はよくわかる気だ。僕は帰つて君の感じなるものを尊重する旨率直な手紙を書き、君の返事を待つたが、遂に君が返事をくれなかつた事を残念に思つた。

君は僕の建前をよく承知の筈だ。座談会であゝいふ事を喋つたつて何んの不思議がある。突然癇を高ぶらす必要はないのである。君は引用してゐないが、ほんたうを言へば僕は目下文芸懇話会の如き存在に対して何等の心の動きも感じてゐないとあの会で明言してゐる。（滑稽な事には今の文士にこんな事を言ふ勇気すらない。）だから批評がましい口は一切きいてゐないのだ。無論賞金をくれるなら喜んで貰つて「文学界」にでも使ふ。君が自分の信念によつて反対したけりや反対せよ。僕は御免だ、もつと情熱のそそげる別の仕事があるからだ。武田君が、空論的反対をせず、会員にめいめい公開状を呈するといふ。結構な事だ。元来空論は嫌ひだから賛成して置いた。これも君は引用してゐないが、座談会のなかにある。中野君、話を簡単にしてみれば、事、懇話会に関しては、無関心派と関心派の相違だけだ。君の眼には無関心派が泥棒に映るのか。僕の様な懐疑的無関心派は放火犯人にでも映るんだらう。そんな苛立しい眼附で人間を眺めてはならぬ。

僕の人間全体を批評するのは少しも構はぬ。大いにやつてくれ給へ。併し「人間とは何物でもない」とか「確定的な思想は欲しくない」とかいふそのまゝでは意味をなさん様な僕の言葉を、自分の文章の調子をつける為に利用するのはよくない事である。僕にも覚えがあるからそんな小細工はすぐわかる。だから君の文章は癇高いばかりで弱々しいのだ。あんな文章では人を感動させる事は出来ぬよ。「今度は、小林を見事にやつつけましたねえ、先生」なぞと取巻きに言はれたつて糞の足しにもならぬのである。もつと沈着になる事を切望する。

「改造」「中央公論」「文芸春秋」「新潮」「文芸」「文学界」の創作欄を全部読み、作品評をする興味が少しも湧かないのには驚いた。自分のわが儘だとばかりは思はぬ。僕を刺戟してくれる作品に接しなかつたのである。今月の作品評を多くの人がやるであらうが、どんな智恵を絞つて何を語るか楽しみなくらゐである。いかになんでもあんまり人を馬鹿にするなと思つた作品が少くとも四つあつた。文芸時評といふものが天下の公器だからと言つて、名前を挙げねばならぬといふ理窟はあるまい。一体何んといふこつた。

匿名批評といふものが、とやかく言はれながら益々盛んになるのも当然な現象である。時評家がこんな嘆きを味つてゐる時に匿名批評が衰へるわけがない。いや衰へてはならないのである。

長谷川如是閑氏が「新聞紙に於ける社会的感覚の欠乏」

（「中央公論」）で、新聞紙の意図は科学の建設ではなく、社会人の感覚の建設にあるとし、新聞知識は、科学的知識と異つて、社会的感覚、社会的情操をいかに刺戟し、社会人的秩序と安寧と更に社会的儀礼と体裁とに及ぼす影響さへ念頭に入れる必要を説き、政治記事や犯罪記事の表現の刺戟性、末梢性を例に引いてゐる。

現代の様に紛糾した社会では、この社会的感覚の平均水準なるものがまことに摑み難い。殊に文学といふ様な元来社会的感覚の平均水準に反抗する性質をもつた仕事の世界に、そんなものを発見する事は一応夢の様に思はれるが、文芸時評といふものの本来の機能はさういふ夢の実現にあるのであつて、文芸時評が文学理論でもなく作家的感想でもない所以もそこにあるのだ。

文芸時評といふものが盛んになつて以来、文芸時評といふものが、この文芸時評本来の任務を果して来たかどうか、これは甚だ疑はしい。正宗白鳥氏や川端康成氏など、文芸時評の名人とされてゐるが、時評といふより寧ろ作家の感想文たるところに魅力があるのであり、又僕なぞは寧ろ文学理論的饒舌とも言ふべき変態的文芸時評を書いて来た。

長谷川氏の説を読み、今日まで文芸時評が、一方理論の建設に走り、一方印象の建設に走り、社会的感覚の建設が無視されて来たといふ事が言へないだらうかと考へた。さう考へて来ると、近頃匿名批評の流行も、この文芸時評界の欠陥を埋める為の必要から生れたものだ、と言へるわけで、杉山平助氏の成功も、文学に対する一般人の社会的感覚の平均水準を常に感じて書いたところから来てゐるのである。

元祖豆戦艦を凌駕する匿名批評が現れさうで容易に現れないのも、かういふ仕事に複雑な才能が要る証拠でもあるが、又かういふ仕事そのものの文壇的新しさにもよるのである、もし匿名批評が健全に発達したなら、文芸時評の如きは要もないものとなるだらう、ならなくてはならぬと僕は思つてゐる。

（「読売新聞」昭和十一年二月—三月）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com